



第6回技術WGでの指摘事項と対応方針案

2024年 9月17日

環境省環境再生・資源循環局

中間貯蔵施設における除去土壌等の再生利用方策検討WG(第7回)

中間貯蔵施設における除去土壌等の減容化技術等検討WG(第7回)

除去土壌の処分に関する検討チーム会合(第10回)

合同会議

主な指摘事項と対応案①

<最終処分に向けた減容技術等の評価案について>

	委員の指摘事項	対応方針案
1	二次廃棄物の情報は記載しておくべき。	留意事項という形で記載ができるよう、整理の仕方を工夫する。
2	安定化技術について、溶出率がどのような試料による溶出率なのか、情報としてあった方が良い。	今後、溶出試験を行った試料の情報等を追加する。
3	安定化の際に、安定化体（固化体）の中にどれくらい（処分対象物を）入れられるかも、減容という観点で重要であり、評価項目に入れるべき。	安定化技術において、減容効果が評価できるよう記載を検討する。
4	数値データの元になる条件を整理するなどした上で、なぜこの評価になるのかという説明性を高めるべき。	実証における対象物、条件などの情報を追加する。
5	処理能力については、各技術が対象とするものやその量を踏まえて整理すべき。	御指摘を踏まえて、対象物の記載等を検討する。
6	安定化技術について、最終処分の方策との関係もあるが、長期安定性などの観点も必要。	今後、最終処分において、どの程度の安定性が求められるかを整理し、検討する。

主な指摘事項と対応案②

<減容技術等の組合せ、除去土壌の処分基準、概略安全評価等について>

	委員の指摘事項	対応方針案
7	排水、排ガス等の濃度限度について、セシウムだけを考えれば良いという根拠を示すべき。	セシウム以外の放射性核種については、環境省等が行った調査の結果、事故前と同程度（事故前20年間の変動の範囲）の放射能濃度であったことを踏まえ、排ガス・排水についても放射性セシウムに関する基準案としている。なお、ストロンチウムについては、既往研究（※）によれば、熔融処理において、排ガス処理工程にストロンチウムがほとんど移行せず、生成物からのストロンチウムの溶出率は極めて低いとされている。 ※三成他（2023）：灰熔融処理における放射性ストロンチウムの挙動、第12回環境放射能除染研究発表会、p.18
8	溶出試験の検出下限値として、なぜ10～20Bq/Lで判断すれば安全であることを説明すべき。	放射性物質汚染対処特措法におけるこれまでの考え方と整合を図りつつ、排水基準よりも十分に低いレベルで設定している。
9	埋立処分に当たって溶出試験の要否について、明確に記載した方が良い。	溶出試験の要否の考え方については引き続き検討を行い、整理する。
10	概略安全性評価について、遮断型相当の処分場で地下水移行を考慮するのであれば、平常時ではなく、事故時として取扱った方が良い。	安全評価における位置付けについては今後整理を行う。
11	再生利用の市場を確保するという視点が必要。	今後の再生利用の推進に当たって考慮する。